

## 市民公開講座

(第4回日本DCD学会学術集会 主催 市民向け企画)

「広げよう、DCDの理解と支援の輪—メディアと人との絆を通じて—」

司会	古荘純一（青山学院大学人間科学部） 内多勝康（もみじの家・元NHKアナウンサー）
シンポジスト	小島慶子（エッセイスト・元TBSアナウンサー） 梶山陽平（FC東京普及部コーチ・北京五輪日本代表） 北 洋輔（国立精神・神経医療研究センター） 澤江幸則（筑波大学体育系）
指定討論	内多勝康（もみじの家・元NHKアナウンサー）

発達障害の1タイプであるDCDは、1987年にアメリカ精神医学会の診断分類に登場して以来現在まで一貫して精神医学の診断名として確立しているにもかかわらず、社会、特に日本における認識は広がっていない。日本においては、2000年以降、特別支援教育や発達障害者支援法などにより、発達障害児・者への支援環境が整備されてきたが、主たる対象はASD、ADHD、LDであり、DCDは「その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」という一文で括られて、その特性に応じた具体的な支援はほとんど行われていない。

一方でDCDは、5～6%の子どもに見られる、背景には神経学的問題がある、成年期以降も50～70%で症状が持続する、などが明らかになっているにもかかわらず、保育、教育の現場では、「本人の努力不足」や「親のしつけの問題」などと、理解が進まず、看過されているのが現状である。

さらに、DCDのある子どもは、学習、社会適応、就労など様々な場面でその特性が適応困難を引き起こし、精神医学的問題が併存することも臨床ではしばしば経験するが、医学の分野では、併存する他の発達障害や抑うつが治療的支援の主たる対象とされており、根本的な要因である「協調運動」の障害への理解や支援が行われていないとは言い難い。

このような現状の中、東京オリンピックが開催される年に、東京地区で、広く社会に向けてメッセージを発信することは極めて重要だと考えて、公開シンポジウムを企画した。テーマを「広げよう、DCDの理解と支援の輪—メディアと人との絆を通じて—」としてそのメッセージを伝えるのにふさわしい方に登壇していただくことにした。発達障害当事者であることを公言して活動しているエッセイスト・ラジオパーソナリ



ティである小島慶子氏、障害者のスポーツにかかわるアスリーの梶山陽平氏、元NHKアナウンサーで現在障害児福祉に携わっている内多勝康氏の3名である。

メディアにも発信力のあるゲスト登壇者に加えて、学会員からも研究、臨床支援の現場からコメントをいただき、会員、そして一般の参加者の人々が手をつなぐことで、DCDの概念を社会に啓発し、当事者に対する医療（診断）、地域での療育、教育の中での治療・教育的介入、そして、家庭や保育園、学校での支援もより深められることができれば幸いである。

